

短歌の「朗読」、音声表現をめぐって（3）戦時下の「短歌朗読」1

一九四一年一月八日を受けて一四日より、夜七時のニュースの後に連日「愛国詩」の朗読が放送され、年を越しても月に一〇日前後は放送されるようになった。私も、愛宕山のNHK放送博物館で当時の「番組確定表」を見ることができた。それらを眺めていると、一月八日を境に、詩人たちとラジオというメディアの間に国家権力が露骨に介入してきた、というより国家権力の傘下に置かれたという方が正確かもしれない。というのも一月八日未明に日本軍は真珠湾攻撃を始めたが、夜の午後八時二〇分から「ニュース歌謡」と称して「宣戦布告」（野村俊夫作詞・古関裕而作曲・伊藤久男歌）「太平洋の凱歌」（日本詩曲連盟作詞・伊藤昇作曲・霧島昇歌）が放送されている。大本営から発表される「大戦果」の都度作詞・作曲家を待機させて対応し、国民の士気を鼓舞していたことになる（前掲『歌と戦争』四二頁。「年表」『日本放送史・別巻』）。

その証左として、大政翼賛会から朗読詩（歌）集の類が立て続けに刊行されていることをあげてよいだろう。国立国会図書館の目録では、次のような冊子（いずれも五〇頁前後）が確認された。

- a 『詩歌翼賛・朗読詩集—日本精神の詩的昂揚のために』 第一輯・第二輯 大政翼賛会文化部編 目黒書店 一九四一年七月・一九四二年三月
- b 『大東亜戦争愛国詩歌集』（『詩歌翼賛・特輯』）大政翼賛会文化部編 目黒書店 一九四二年三月
- c 『大詔奉戴・愛国詩集』大政翼賛会文化部編 翼賛図書刊行会 一九四二年一〇月
- d 『内原の朝・青少年詩集』大政翼賛会文化厚生部編翼賛図書刊行会 一九四三年一月
- e 『軍神につづけ・和歌三十三首・俳句五十七句・詩十九篇』大政翼賛会文化部編 大政翼賛会宣伝部刊 一九四三年
- f 『朗読文学選・現代篇（大正・昭和）』大政翼賛会文化部編 大政翼賛会宣伝部刊 一九四三年五月

私の手元には、(a)の第一輯改版（『朗読詩集・地理の書他八篇』修正再版（一九四二年一〇月、五万部）と（b）（f）がある。いずれも仙花紙の粗末なものだが、実態としてどのように編集され、どのように利用されていたのだろうか。

(b)の「跋」には、一月八日を受けて「文字を通じて詩を味ふばかりでなく、言葉を通じてこれを味到することを予てから提唱してみた文化部では、早速これらの詩を音声を通して国民に聞かせることを放送当局者に進言し、他方このやうな詩を献納して貰ひたいと詩人団体を通じて詩人各位に懇へた」ところ、一九四一年末までに約三〇〇篇の詩が集まり、すでに、若干のものはラジオで放送され、レコードに吹き込まれ劇場で朗読された、とある。野口米次郎「宣戦布告」、西条八十「戦勝のラジオの前で」、堀口大学「戦ひて死する幸」高村光太郎「必死の時」などが収録されている。また（b）の巻末には「大東亜戦争短歌抄」として五一首が収録されているが、短歌については、歌人に献納を呼びかけたものではなく、日本文学者愛国大会やラジオで朗読されたものなどを中心に集めたという。そこでは「正直に告白すれば、短歌をいかに朗読すべきかの技術について、まだ十分の確信がわれわれになかったからである」とも書かれ、（f）の「はしがき」にも、詩の朗読運動は反響を呼んでいるので「これを更に拡充し、短歌の朗詠と散文の朗読へと幅をひろげ」ていきたい旨の記述があり、「短歌朗読」の位置づけがわかっていく。

（『ポトナム』2008年5月号所収）